

## 編者まえがき

国際基督教大学アジア文化研究は、キャンパスが紅葉に色づく頃、恒例の公開を旨とした国際シンポジウムを主催してきている。2014年度は11月29日・30日の両日に涉って「アジア文化研究のいま」と題したシンポジウムを開催した。本号はその成果を取録したものである。

当研究所は本学専任教員を構成員とする所員に加えて、多くの研究員を擁している。研究員はそれぞれの専門分野において、研究所の多彩な学術活動を支えてくれている。しかし意外にも、これまで研究員を構成主体としたシンポジウムが開催されてこなかった。所員会議ではこのことを鑑み、2014年度の大会企画としては、いわば<研究員大会>ともいべきものを開催してはどうか、という提案がなされ、実行に移されることとなった。かつてない試みである。全研究員に報告への応募を広く呼びかけ、主題を考えることとした。研究員の専門は多方面に渡り、それらを一つのテーマに収斂するにはもとより無理があり、専門領域を越えて知見の拡大と相互共有を図るべく、「アジア文化研究のいま」といった緩やかなテーマ設定にした。

シンポジウムは、当研究所がこれまで蓄積してきた研究資産をより広範に、より有機的に機能させるべく、斯界の泰斗による基調講演と気鋭の研究者による先端の研究報告とのコラボレートを目差した。初日の基調講演では、飛田良文先生（元ICU語学科教授・国立国語研究所名誉所員）と小泉仰先生（元ICU社会科学科教授・慶応大学名誉教授）が、二日目には、学士院会員の斯波義信先生（元ICU社会科学科教授・東洋文庫常務理事）と欧米圏の日本思想史研究の第一人者であるピーター・ノスコ先生（ブリティッシュコロンビア大学教授・当研究所研究員）が含蓄に富んだ実に滋味ある講演をしてくださった。豪華な顔ぶれである。それを受ける形で、主に若手研究者による11本の最新の研究報告がなされた。基調講演、個別研究ともに充実した質疑応答が交わされ、当初の思惑通り専門領域を横断した知の相互交流が促進され、実り多いシンポジウムとなった。

最近、文部科学省によって国立大学に「人文社会科学系学部の組織廃止」の方針が通達された。私立大学も対岸の火事ではすまされない。各大学の識見が今まさに問われているのである。このような愚策に抗して、否、そうであればこそ、国際基督教大学アジア文化研究所はアジアに関する人文知・社会知の更なる究明と学術活動のより広範な展開を遂行してゆく所存である。

最後に、シンポジウム開催及び本号の編集に携わった研究助手の高崎恵、岡本佳子、宮沢恵理子、鄭載勲、並木英子、加畑聡子、岸佑、秘書の相川興子、渡辺公美子、菊地亜耶の各氏から多大の尽力を得たことを記して謝意に代えたい。

2015年3月31日  
国際基督教大学アジア文化研究所所長  
小島 康敬